

写真家・ジャーナリスト 國森康弘さんの講演

いのちをつなぐということ

—被災地、紛争地、在宅看取りの現場に想う—

第32回AKIHIKOの会開催



第32回AKIHIKOの会は二〇一七年三月八日(土)写真家・ジャーナリストの國森康弘さんをゲストにお迎えして東京・神楽坂日本出版クラブ会館で開催されました。講演会に先立ちAKIHIKOの会世話人会が開かれ、新たに世話人となった国立豊橋医療センター緩和ケア病院・医師佐藤健さんと福岡市にのさかクリニック・在宅医二ノ坂保喜さんから抱負が述べられた後、これからの会のあり方について協議されました。

14時からの会では、開会の挨拶で世話人の比留間洋一さんから趣旨と國森さんの紹介がありました。

國森さんの講演は「いのちは誰からもらったの?」という問いかけから始まりました。「お母さんとお父さん」。さらに四人のお婆ちゃんとお爺ちゃん。そうしてだんだん遡っていくと、やがて一〇〇万人を超えるお婆ちゃんお爺ちゃんになっていく。

國森さんは、ここで小中学生に「どの一人が欠けても自分のいのちはない。奇跡のようないのちのバトンがなくなると自分たちは生きている」という、いのちの大切さに気づかせます。

講演はスライドを見せながら始まります。初めは3・11東日本大震災の写真でした。國森さんは震災の翌日福島県に入り、捜索隊も入っていない被災地でご遺体を確認しながら宮城県、岩手県へ。そこで目にした様子が写真とやさしい語り口で紹介されました。

國森さんは震災以降も被災地に足を運んで、南相馬市の末期癌患者の青年やALS(筋萎縮性側索硬化症)の婦人を取材したり、死期が迫った脳腫瘍の少女の東京デイズニード行きに同行したりします。

さらに過去に撮ったスーダン、イラク、シリアなどの紛争地や経済的な困窮地域でのいのちを全うできなかった子達を映した後、滋賀県東近江市永源寺地区での医師や看護師による在宅介護・在宅看取りの現場、そして國森さんの最新刊『いのちつぐ「みとりびと」第3集』の舞台となった「ホームホスピス棟(ゆずりは)」の取り組みなど、在宅看取りで死を迎える人を数百枚のスライドを使って見せてくれました。

病院で死ぬ人が八割近くになった現今、住み慣れた自宅で子や孫たち家族に見守られながら旅立っていく人たちの最期に、いつか訪れる自分の終焉を重ねた人も多かったのではないのでしょうか。

上映後は、國森康弘さんと世話人の米沢慧さんとの対談。國森さんの「冷たい死」「あたたかい死」というメッセージに対して会場から質問もあって、いのちについて内容のある対談となりました。

最後に岡村昭彦の長女佐藤純子さんから参加者にお礼の言葉があり、今年のAKIHIKOの会はお開きとなりました。講演会参加者は52名。第二部懇親会は近くの中華料理店に会場を移して開かれ、参加者は28名でした。

いのちをつなぐと いうこと―被災地、紛争 地、在宅看取りの現場に想つ―

國森康弘



國森 みなさまこんにちは。私は國森と言います。今日は琵琶湖のある滋賀県からやっています。一九七四年生まれとプロフィールに書いてあるんですが、見た目はもつとふけとるやないかと思われたかも

しれません（笑）。一応戸籍上七四生まれになっていきますので多分、四二歳です。

お医者さんとか看護師さんに同行取材させてもらうと、時折、「どつかのお寺さんですか」と聞かれることがあります。お医者さんの後ろに見たことない怪しいお坊さんみたいな奴がおるので「もしかしてわしが死ぬのを待つとるんちゃうか」と（笑）、戸惑った顔をする人がおられます。

今でこそお坊さんは人が亡くなってから登場しますが、昔はお爺ちゃんお婆ちゃんがお心配事を相談したり、自分のお葬式についての希望を話したり、そういうふうにしていたそうです。お坊さんを、自身の最晩年、最終幕に家に呼んで、南無阿弥陀仏と唱えたり、お経と一緒に読む。その姿をみてご家族は「ああ、お爺ちゃんもお婆ちゃんも自分の旅立つ時期がわかっている。お別れの時期が来てる。悲しいけどしっかり見送らないといけない」と看取る覚悟ができた、あるお寺さんが仰っていました。

今、そういう光景があるのかといわれて、自分の狭い取材範囲では一概には言えませんが、今日写真に出てくる方々にはそういった日々を送ってきた方がおられます。

今日のスライドは全国の小学校とか中学

校で講演する際に子供たちに見せるものと同じものです。自分は子供たちへ講演の最初に「みんなのいのちって誰からもらったんですか」と聞くようにしています。

すると子供たちは「お母さん、お父さん」と答えてくれます。「じゃあ、お母さんとお父さんは誰からのちをもらったのですか？」と聞くと「お婆ちゃんとお爺ちゃん」と。「じゃあお婆ちゃん、お爺ちゃんは、誰からのちをもらったんですか」と聞くと「ひいお婆ちゃん、ひいお爺ちゃん」と答えます。「じゃあ自分が生まれてくるまでに、お婆ちゃんとお爺ちゃんが一体何人いるのか、数えられるところまで数えてみましょう」といって子供たちと一緒に数え始めます。

一人の子供にお母さんとお父さんがいて、四人のお婆ちゃん、お爺ちゃんがいて、八人のひいお婆ちゃん。ひいお爺ちゃんがいる。そうして遡っていくと、次は一六人、次は三二人、さらに六四人、一二人、二五八人、五一二人、一〇二四人、二〇四八人、四〇九六人、八一九二人とお婆ちゃんお爺ちゃんが増えていきます。これぐらいまでは小学生でも頑張って数える子はいます。

算盤をやってる子は特に強い。さらに一六三八四人。三二七六八人。六五五三六人。一三一〇七二人。二六二一四四人。五二四二八八人。そして次の代で一〇〇万人を超えるのです。

ここまで一緒に数えていくと、子供たちは「ああ、自分がこの世に生まれてくるのに、一〇〇万人を超えるお婆ちゃん、お爺ちゃんがいるんだ。一〇〇万人を超えるお婆ちゃんお爺ちゃんのうち一人でも欠けていたら自分はここに生きていないんだ。そんな奇跡のような長いのがつながつて自分がここに生きている」ということに気づくのです。

お婆ちゃんお爺ちゃんがつないで来たいのちのバトンを手にして自分はその先頭ランナーとして今ここに生きている。その手にしているバトンを自分たちは次の誰かに手渡すという役割を担っている。

自分の背中に一〇〇万人を超えるお婆ちゃんお爺ちゃんがあったように、自分は一〇〇万を超えるかもしれない未来の子供たちのいのちを預かっている。だから自分のいのちには自分だけのものじゃなくて、未来の子供たちのために大事につないでいくことが大切だ。

自分のいのち、友達のもの、家族のいのち、そして遠い国の子供たちのいのちも大事にする。そんなふうに見ていたバトンリレーの写真を、みなさんに見ていただきたくて今日もこうしてやって来ました。

じゃあここからは写真がメインになりますので、会場は暗くさせてもらいます。今でも講演では基本的にはこの一枚からはじめるようにしています。

二〇一一年三月一日。自分はその時、滋賀県東近江市で、ある医者への訪問診療と往診の取材中、寝たきりのお爺ちゃんの部屋でつけっぱなしだったテレビで東日本大震災の発生を知りました。

お爺ちゃんお婆ちゃんの写真を少し撮らせてもらって、家に戻ってからその日のうちに滋賀県を出発しました。三月一二日の朝、福島県に着きました。それから車で寝泊りしながら海岸沿いを北へ北へと宮城県、岩手県の方へ上がっていったのです。その時に撮った写真です。

お婆ちゃんが津波にのまれて亡くなりました。お孫さんが駆けつけてきてそのお婆ちゃんのご遺体の前で手を合わせておられます。



(写真は上映中のスライドを撮影したもの、以下同じ)

もしかしたら自分の家族かもしれない。そう言いながら一枚一枚、毛布をめくってご遺体の顔を確認しておられる方がいました。後ろに写っているのは大阪から駆けつけた警察隊員ですが、全国から消防隊、自衛隊、警察隊員の方が駆けつけていました。

でもあまりにも被害が大きすぎて、人手は全く足りていません。自分もカメラは持ってはいましたが、一人でも救助につなげられる人、息のある人を見つけたらと思つて、なるべく捜索隊がまだ入っていない地域を歩こうとしました。でも、自分が一人で発見できた方はみなさん既に息絶えておられました。

三月一二日の朝、福島県に着きました。海岸沿いに出てきたのは南相馬市あたりです。そこから、少し北に海の側を走っていると住宅街がありました。多くの家が津波によって山手の方に押し流されています。そこに自衛隊の手漕ぎボートが掛け声をかけながら近づいてきます。行く先を見ると、二階のベランダから幼い女の子たちが助けを求めていました。

丸一日ぶり、救出された、ああよかった、この女の子が助かったと思つて何枚か写真を撮りました。でも、その直後この家の一階から女の子の兄弟、家族、三人が遺体で発見されます。自分にとってはこれが最初に撮った東日本大震災の一連の写真です。

こうした現場を目の当たりにする中で、

自分はこれからもこの地に通わせてもらわないといけないと思いました。二万人近い人が亡くなった悲しみの地です。その亡くなった人の分もこれから一生懸命生きようとする人たちの姿があります。亡くなった人の分も大事にこれから生きて、そして次の世代にいのちをつないでいこうとする人たち。自分なりの視点でそんな人たちの姿を伝えていかねばと思いました。

この水浸しだったところは、数年後行つてみると廃墟の家が三軒、あとは草っ原でした。その翌年またその翌年行きましたが、現在は人の住まない地域になっています。

南相馬市は人口七万人ほどです。それが地震と津波、それから原発事故で殆どの人々が避難しました。一時一万人にまで減ったこの町にも徐々に人は戻ってきて、ようやく五万人を超えたという話です。でも若い世代ほど戻ってきていません。特に子供は半分ぐらいが避難したまま戻ってきていません。避難した先でいじめを受けたり、自死したり、あるいはまた福島に戻って来ざるを得なかったりした子供もいます。

それから福島第一原子力発電所に一番近くて稼働中だった病院がこの南相馬市立病

院ですが、原発事故が起きてからしばらく誰もここで出産しようとしませんでした。この女の子の赤ちゃん。みやびちゃんという名前の赤ちゃんが原発事故から一年何か月か経つて、初めてここで生まれてきた第一号の赤ちゃんでした。



このみやびちゃん以来ここで生まれてくる子供の数は徐々に増えていますが、それでも震災発生前に比べると、半分ぐらいに留まっているそうです。これまで暮らしていた子供の半数がいなくなって、これから生まれてくる数も半減しているというそんな状態が続いています。

ここで暮らすお爺ちゃんお婆ちゃんは、「わしらが死んだあと誰が家を守ってくれ

るんだらう、誰が墓を、田んぼや畑を継いでくれるんだらう、わしらが死んだあと、この町自体が消えてしまうんじゃないか」そんなふうに仰っていました。

この地に暮らす人たちを支えようと厳しい環境の中で工夫を重ねながら、一生懸命支えている専門職の人たちがいます。例えば先ほどみやびちゃんという赤ちゃんが生まれた市立病院。ここでは訪問診療をする在宅診療部を新たに立ち上げました。寝たきりの方やがんやいろんな病気を抱える方の元へ自分たちから訪問するようになったのです。

仮設住宅でがんを抱えて、寝たきりの一人暮らしのお婆ちゃん、認知症が深まっていく一人暮らしのお爺ちゃん、いろんな方のもとへ医者や他の専門職の人たちが連携をとって通うようになりました。

原発事故はこれまで一緒に暮らしていた家族やご近所さんをバラバラにしてしまいました。これまでであった人のつながりがなくなりつつあります。そうしたなかでは単に訪問診療、訪問ケアをするだけではだめなのです。そこで、人のつながりを強くするために市立病院の専門職の人たちはいろいろ

んな工夫をしています。



例えば、仮設住宅で折り紙サークルを始めました。お婆ちゃん達の話聞く白い服を着た彼も医者さんです。「せっかくだからこの折り紙サークルがずっと続くよう

に日本中や、他の国の人にも買ってもらう、貰ってもらおうと、そのマーケットづくり、ネットワークづくりに奔走した」そんなお医者さんもいます。今でもこの折り紙サークルは、毎日午前と午後、この仮設住宅で続いています。

またおじさん世代と言われている、阪神淡路大震災でも仮設住宅や復興住宅にこもりがちになってアルコール依存症だったり、うつ病を患ったり、なかには自殺や孤独死、無縁死と言われる最後を遂げる中高年が増えていきました。

できるだけそういった事がないように、仮設住宅にこもりがちな中高年のおじさんに外に出てきてもらって、一緒に汗を流そうと、男の木工教室というものも市立病院のお医者さん達が立ち上げました。

これは単に木工サークルの遊び仲間ではなくて、区役所とか市役所のテーブル、椅子、駅前ベンチ、小学校に寄付する棚など、時にはお金を出して買ってもらえるほどの本格的な製品づくりをしています。毎週日曜日の午前中、プロの職人さんと一緒に作っています。市立病院のお医者さんも一緒に毎週汗を流しています。

この南相馬の仮設住宅で二八歳だったカツヒコさんという男性に会いました。カツヒコさんは、六、七年ぐらい前に骨肉腫というがんの一種の病気を発症しました。治療をしながら会社勤めをずっと続けていました。

カツヒコさんにはある夢がありました。それは、子供とキャッチボールをする夢でした。好きな人と結婚をして、できれば二人子供を授かって、そしてその子供とキャッチボールをする。カツヒコ君自身が幼かった頃にお父さんにキャッチボールをしてもらった事がなかったそうです。それがすごく寂しかった。だから自分の子供とキャッチボールをするのが夢なのです。

病気を抱えながら会社で働いてその夢のためにコツコツ貯金をしていました。でも自分が出会った頃には、体のあちこちにがんが広まっている状態でした。四畳半二間の仮設の部屋にお婆ちゃんと二人で暮らして、隣にはお父さんとお母さんが四畳半二間で暮らしています。

自分が行っているとき、結構、呼吸が苦しくなったり、パニックになったりすることもあり、容態が徐々に重くなってきてい

ました。呼吸が苦しくなると、看護師さんとかお医者さんが来てくれます。

お医者さんはカツヒコ君が若い分、進行も早く、もしかしたらあと数週間持たないかもしれないと仰っていました。

カツヒコ君もその自分の体の状態に薄々気づいているようでした。子供とキャッチボールする夢も叶わないだろうなど、そんなふうにならなくなりました。もうその夢は諦めたとも言いました。でも今のうちにやっておきたいことがある。何かと聞くと、それは、あとに残るお母さんのために二人の笑顔の写真を残しておきたいということでした。私はそれを聞いて、毎日少しずつカツヒコ君とお母さんの笑顔の写真を撮っていききました。

ただ、そんな日は長くは続きませんでした。ある日病室に行ってみると、お母さんやお婆ちゃんに手を握られながら、「もうゆっくりしていいよ」「これ以上病氣と闘わなくていいからね」と声をかけられていました。自分もカツヒコ君の手をとって「お母さんと撮った笑顔の写真を印刷して持って来るからね」。そう言ったらカツヒコ君は目を丸く開いて、そしてそのまま息を引

き取りました。お医者さんが言っていたように駆け抜けるようにカツヒコ君は旅立って行きました。

亡くなる前に、カツヒコ君はお母さんに手紙を残しています。

「わたしは、長くは生きられそうにありません。親より先に死ぬのは一番の親不孝だと考えていましたが、本当に親不孝になってしまいです。最後の償いになるかどうかかわかりませんが、少しでも貯金を残します。これは、母さんのために使ってください。わたしなりに充実した人生だったと思います。最後に、母さんごめんね。今度もしもう一度生まれてくることがあったら、母さんの子供で産まれてくる。俺の分まで長生きしてください。希望として、お墓を新しくつくって下さい。デザイン墓が希望です」

カツヒコ君は病気を抱えながら会社勤めをしてコツコツ貯金をして、お母さんに残していききました。でもその前に一度だけ、まとまったお金を使っています。それが、自分でデザインしたこのお墓でした。「夢希」と刻んだこのお墓をあらかじめ石材店に頼んで建てておいたのです。



自分は亡くなる前の日にもお母さんと一緒に写った笑顔の写真を撮りました。その写真は遺影としてお母さんの仮設の部屋に飾られています。九月一二日が彼の命日です。なるべくその時期に自分もこの南相馬

に行つて、お母さんと一緒にお墓まいりをするようにさせてもらっています。

宮城県仙台市では、六〇代、シユクコさんというお名前の女性に出会いました。シユクコさんも五〇代の時にある病気を発症しています。それは、ALSという英語の頭文字をとった病気です。日本語で言うと、筋萎縮性側索硬化症という名前は難しいですが、全身の筋肉が衰えて動かなくなっていく、厳しい進行性の難病です。手足が動かなくなっていく、歩けなくなる、話せなくなる、食べられなくなる、トイレに行けなくなる、そして最後には自分で呼吸することさえできなくなっていくます。

自分で呼吸できなくなった時に人工呼吸器をつけるかつかないかの選択を家族は迫られます。人工呼吸器をつけなければそれは死ぬということです。人工呼吸器をつければ家族が二四時間三六五日、介護をするということなのです。

当時、七割を超えるALS患者さんが人工呼吸器をつけないという選択をしています。家族に負担をかけたくないといった理由で人工呼吸器をつけない選択をしたのです。

シユクコさんには年頃の娘さんが二人いました。シユクコさんは最初「私も人工呼吸器はつけない」と仰っていました。

でも、娘さんたちにとっては「それは私たちのために死ぬということでしょう、それはとてもじゃないけど受けとめられない、考え直して」と娘さんは言ったそうです。話し合った結果、娘さんたちが犠牲にならないで人工呼吸器をつける方法を探すということになりました。

そこでシユクコさんはすでに寝たきりでしたが、右手の親指が少し動いたのでその右手の親指でパソコンを操作して、地元の新聞社に投稿記事を書きました。

「ヘルパーの資格を持っていて働いていない方、あるいは看護学生でボランティアを試みたい方、私をサポートしてくれませんか。年頃の娘がいて、その娘たちの人生を私の介護で犠牲にするのは母としてこんなにつらいことはありません。人手が全く足りません。主人は七年前に他界しました。家に来て下さる方を募っています」

そんな内容の投稿記事を見て、十数人の人が手を上げました。看護師さんとかヘルパーさん、さらに近所で知っているお友達、さらにその輪が広がって地元の学生さんた



ちがサークルを立ち上げることになりました。学生たちは地元の大学や専門学校で、看護とか介護を学ぶ若者でした。そんな彼ら、彼女たちが東京までわざわざ行って、重度訪問介護というヘルパーの研修を受けてシユクコさんの元にやってきました。

そしてシユクコさんは人工呼吸器をつけます。医療保険とか介護保険とか、難病指定とか、今ある、既存の制度では二四時間三六五日すべては埋められません。その埋められない時間帯をこの学生たちが夜間二人一組になってシユクコさんの元に来てくれました。痰の吸引をしたり、体の向きを変えたり、そうやって家族以外の誰かが常に側にいる体制が整いました。

家族は、家族にしかできない寄り添いを、少し心と体の余裕をもらって続けることができず、シユクコさんは病院ではなくて、施設でもなくて、自宅で暮らしていくことができるようになりました。

ちなみにこの彼は、吸引王子というあだ名をつけられた男子学生。大学では看護とか介護ではなくて、経営学部の学生さんでした。そんな彼も東京で研修を受けてシユクコさんの元に通って痰の吸引とかをしています。

二人娘さんがいるといいましたが、一人目の娘さんはそんな中、結婚をして二人の子供を授かります。シユクコさんはお婆ちゃんになります。そして二人目の娘さんも結婚をして、結婚式にはもちろん、車椅子でシユクコさんも出席します。

ただ、ALSという病気は徐々に徐々に進行していきます。体の殆どが機能しなくなって病院に入院ということになりました。やがていつ亡くなってもおかしくないという状態になった時娘さんたちは言いました。「この窓のない病室からお母さんとさよならできない、みんなで過ごした私たちの自宅からお母さんを見送りたい。お母さんを家に連れて帰りたい」と。「お母さんを家に連れて帰っている道中で、亡くなる可能性もある」と医者には言われましたが、「もしそうなくても構わない、その時はしょうがない。とにかくお母さんに家に戻ってきてほしい」と娘さんたちは言ってシユクコさんを家に連れて帰ります。

ご近所さんやお友達、それから地元の学生たちが、「おかえりなさい」とシユクコさんに声をかけます。

家に戻ってから、九日目でした。その日、朝からちよっとお母さんの様子が違う気がする、と、シユクコさんの二人目の娘さんが、「今日はちよっと違うな、今日はもう一回パーティーしよう」と若者たちに声をかけます。そして、シユクコさんを囲んで、ビールをあげて、家族の思い出の映像を流しながらシユクコさんと一緒にパーティーをし

ます。そしてその日の夜、シユクコさんは一〇代、二〇代、三〇代の若者五人に囲まれながら息を引き取りました。

実はこの学生たちがつくったサークルは、七代続いていて、卒業生たちがいます。卒業生は現在看護師さんになったり、保健師さんになったり、ヘルパーさんになったり、いろんな専門職についておられます。そんな卒業生の人たちがシユクコさんのお葬式で言いました。

「シユクコさんこそが私たちにとっての一番の先生でした。シユクコさんが、身をもって大切なことをたくさん教えてくれた。体が全く動かない人に、病気がどんなに進行していく人に、どう接すればいいのかその技術的な所から、心理的な所も含めて大事なことをたくさん教えてくれました」。

「そして時には文字盤を使って、私たちの人生相談、恋愛相談、進路相談にもものつてくれた。そんなシユクコさんの教えがあったから、私は、私たちはいま専門職として、プロとしてどんな人を前にしても逃げずに真正面から向き合おうとしてその人の心に寄り添おうとして共に歩む、そんな覚悟と心構えを教えていただきました。シユクコ

さんが、私たちを育ててくれました」と。

同じく宮城県ですが、海のすぐ側の町ではカレンちゃんという女の子に出会いました。カレンちゃんは小学校四年生でした。地震が起きて津波が押し寄せてきましたがカレンちゃんの家は、小高い丘の上の方にあったので、そこまでは津波も届かずにカレンちゃんもなんとか無事でした。でも、その地震の直後からよく気分が悪くなるようになりまし。頭が痛くて、よく吐いたりするようになります。病院に行ってお医者さんに診てもらいますが、よくわかりません。震災によるストレスかもしれないと胃薬をもらったり、時々点滴を打ってもらったり、四月になっても五月になっても六月に入ってもカレンちゃんの容態はよくなりませんでした。

見兼ねたお母さん、お婆ちゃんが大きな病院で徹底的に検査してもらおうと言いだします。そこで大病院に連れて行き検査をしたら、医者から「カレンちゃんは今すぐ手術が必要です。すぐに入院してください」と言われました。

前の日まで体調が悪い中でも、なんとか友達と遊んだり、一輪車にも乗ったりして

いたカレンちゃんですが、次の日の朝一番に手術をし、そのまま入院して、抗ガン剤治療、放射線治療がはじまりました。

カレンちゃんの頭にはがんが見つかったのです。脳腫瘍でした。それから病気との闘いがはじまります。震災の発生した年のクリスマス頃に「残念ですが今の医療では手の施しようがありません。カレンちゃんに残された時間は、あまり長くありません」と告げられました。

「大好きなお母さんたちが待っているお家に帰りたい」。カレンちゃんは自分の家に帰ってきます。

お医者さんが家まで来てくれます。看護師さんも来てくれて、お風呂が大好きなカレンちゃんのためにヘルパーさんも週に二回、お風呂に入れるのを手伝いに来てくれました。

実はお医者さんが、自分にこっそりと言いました。「これまでも、危ないときは何度もあったけど、あと二、三週間もつかどうか」と。そんな話を聞く少し前に、カレンちゃんは一カ月半後、家族みんなで東京ディズニーランドに家族旅行に行くという目標を立てていました。

それを聞いたお医者さんは、「正直、そ

「こまで体が持たないんじゃないか」と言っていました。「ただ、目標を持つこと自体は、生きる力につながるかもしれない」そんなふうにも仰っていました。自分はカレンちゃんと約束をします。「デイズニールンドに行ったら家族写真いっぱい撮ろうね。それからデイズニーの好きなキャラクターと一緒に写った写真いっぱい撮ろうね。その時は、滋賀からとんでくるから連絡してね」そんな約束をしました。

カレンちゃんからデイズニールンドに行くという連絡をもらい自分も飛んできました。お医者さんがお守りを渡しに来てくれ、看護師さんがボランティアで来てくれました。石黒さんという看護師さんです。石黒さんはこんなことを言っていました。

「人は死が近づくほど出来ることが少なくなってきた、出来ないことばかりがどんどん増えて行く、出来ないことだらけになってしまふと感じてしまふ。でも、本当は最後まで出来ることは沢山ある。私は出来ないことに目を向けるのではなくて、本人がしたいこと、本人が出来ることに目を向け、そのことを全力で手伝いたい。カレンちゃんとご家族との思い出づくりを精一杯

手伝いたい」と仰っていました。

ようやく到着したデイズニールンドのホテルのベッドにまずカレンちゃんを寝かします。そしてお母さんが窓の外見てごらんとカレンちゃんに声をかけます。外を見ると、デイズニールンドの中が見渡せる眺めのいい部屋でした。

カレンちゃんはデイズニールンドのキャラクターの中でも特にミニーマウスというキャラクターが一番好きでした。ミッキーマウスの女の子の方のキャラクターのミニちゃんです。「ミニちゃんに会えたらいいなあ」「そうね、会えたらいいね」。

そんな話をしながら、部屋で一晩過ごしてそして、次の日の朝、車椅子でゲートめぐりました。

デイズニールンドはカレンちゃんにとっては震災が起きるまでは毎年一回、家族や親戚とみんなで家族旅行に来ているところです。一番楽しみにしているイベントなのです。

しばらくデイズニールンドの中を回っていると、だんだんとカレンちゃんの脈拍が弱ってきました。一分間に六〇回、七〇回打っていたのが二〇回台にまで弱っていき、とうとうカレンちゃんは救護室に運ばれて

いきます。もしかしたらこのままカレンちゃんは息を引き取ってしまうかもしれないとご家族は思ったそうです。その時でした。救護室にカレンちゃんが一番好きだったミッキーマウスのキャラクターミニちゃんがひよつこり顔を出したのです。「あれ、こんなところに」お母さんもカレンちゃんもびっくりしました。



なぜかミニちゃんがここにいます。一緒に写真を撮りました。握手もしました。暫く一緒に過ごして、ミニちゃんとバイバイをします。その後で脈を測ると一分間に六〇近くに上がっていました。ミニちゃんから生きる元気をもらってカレンちゃんは二日間の家族旅行を終え、みんなで宮城

県の自宅に帰ってききました。カレンちゃんは家に戻ってきて二日後に息を引き取ります。

カレンちゃんの病気が見つかる前から、そして病気が見つかった後もお友達が大好きよく遊びに来てくれていました。そんな友達がお別れにもやってきました。友達は言います。「このカレンちゃんが、乗ってる乗り物を世界一可愛い乗り物にしよう」とお柩にみんなでぬいぐるみ入れたり、シールを貼ったり、メッセージを書いたり、手紙や花を入れたり、カレンちゃんに直接、触ったり、声をかけたりしていました。

自分たちが生きている今日という日は、カレンちゃんが生きたいと願っても生きられなかった明日だったのかもしれない。カレンちゃんの分も大事に今日という一日を生きて行く。カレンちゃんの分も、自分のいのちも友達のものも大事にする。そんな約束をしながら、お友達はお別れを悲しんでいました。

自分は看取りの取材をする以前は、世界の紛争地、経済的な困窮地域を回っていました。そこには子供たちがバタバタと死んで行く姿がありました。銃撃や爆撃に巻き

込まれて亡くなっていく子供もいます。病院が破壊されて、治療が受けられずに亡くなっていく子供がいます。勿論それは子供だけではなくて大人も同じです。

孤児の村と呼ばれてお母さんお父さんが亡くなった子供たちが大勢住んでいる村もありました。あたたかい死というのは授かった自分のいのちを生ききって、大切な人に寄り添われながらお別れと感謝の言葉を交わしながら、次の世代に、次の子供たちに、いのちのバトンをつないでいける、そんな死に方なのかもしれません。

銃撃や爆撃だけではなくて、食べ物十分に手に入らなくて、栄養失調の子供たちもいます。乾季になると井戸が枯れて水が飲めなくなる、そんな地域もあります。栄養失調になって弱っていくと、日本でなら死なないような感染症や下痢で亡くなる子供たちもいます。

でも、よくよく考えると、戦争とか貧困といったものは人が生み出す人災。その人災さえなければこの子達の多くはもっと長く生きられたはずです。この子達の多くが、大人になってそして結婚をして、子供を授かる子供たちも多かったと思います。さらに長生きできれば、孫やひ孫にも会えた、

そうやっていのちをつないでいけたはずの子供たちが、そのいのちのバトンリレーをブチリと断ち切られる悲しくて冷たい死の現場でした。



自分はそんな冷たい死がなくなることを願って行動してきました。でも、その一方

でもうひとつ、自分が知りたい、伝えたいと思うようになったことは、ある意味で冷たい死の対局にある、あたたかい死というものです。

もしかしたらあたたかい死の先にはきつといのちのつながりが見えてくるかもしれない。わからないことがいっぱいでしたが、天寿全うの営みを知りたい、伝えたい、そしてできれば、子供も含めて、全世代で共有したいと思うようになりました。

日本の子供だけではなくて、日本の人たちだけではなくて、イラクやシリアの人たちの営みを全世界で共有したいと思うようになりました。自分がそんなあたたかい死を探し始めてご縁をいただいた地域がいくつかあります。

そのひとつが、滋賀県の東近江市。特に、永源寺地域という農村地帯です。ここでは、小学校五年生だった恋(れん)ちゃんという女の子に出会いました。お父さん、お母さん、お婆ちゃん、そしてさらにひいお婆ちゃんと四世代で暮らしていました。

恋ちゃんのひいお婆ちゃんのタケコさんは一七歳で結婚をして、子供を授かり長生

きして孫が産まれて、更にひ孫が産まれてきた。そのひ孫が恋ちゃんです。

亡くなる前のタケコさんは年相応にもの忘れが多くなり認知症が深まっていきました。家族の名前も忘れていった。ただ亡くなる一週間ぐらい前にタケコさんは自分で入れ歯を外します。「もうこれいらん。使わん」と入れ歯を放り投げ、それから、布団に潜り込んで、一切食事をとろうとしくなくなりました。

その姿を見て、ご家族は「ああお婆ちゃんボケてはるけど、自分の旅立つ時期、しつかりわかっているんやなあ。悲しいけど、お婆ちゃんの旅立ちをしつかり見送らなあかん、そんな時期が来たんやなあ」と。見送る覚悟を決めるきっかけをこのお婆ちゃんが家族に与えてくれているようでした。そしてこのまま布団の上で静かに息を引き取りました。その表情はすごく穏やかでした。

息が止まってからそろそろお医者さんに連絡しようかと「お婆ちゃんの息が止まったみたいですよ」と電話を入れました。

永源寺診療所の花戸貴司ドクターがやってきて息が止まったことを確認しました。その後、看護師さんがお婆ちゃんに優しく

お化粧をしてくれます。娘さんとかお孫さんが、お婆ちゃんに化粧をされるお家もありますが、「看護師さんに上手にお化粧してもらってよかったねー」とご家族が声をかけていました。

そして、小学校五年生だった恋ちゃん。お婆ちゃんの顔にかけられた白い布を自分でとって、いっぱい涙を流しながら、お婆ちゃんに「今まで大事にしてくれてありがとう」と、お礼を言っていました。当時小学校五年生だったので、この春から恋ちゃんは高校三年生になりました。

このナミお婆ちゃんもタケコさんと同じように、認知症が深まっていました。それでも一人暮らしをずっとされています。永源寺地域ってだいぶ滋賀県の東端で山奥の方なんです、その中でも一番山奥の三重県との県境にある君ヶ畑という名前の集落でお婆ちゃんは暮らしていました。診療所からも一時間ぐらいかかる。そこで一人暮らしをしていたのです。

どうやって一人暮らしが可能なんだろうと思って見てたんですが、もちろんお医者さんとか、看護師さん、それからヘルパーさんとかケアマネージャーさん、そういう

た人たち、専門職の人が来てくれるのはもちろん、薬局のお薬屋さんも家まで薬をいっつも届けてくれます。ヘルパーさんも手伝ってくれる。それから土曜日、日曜日になると、娘のエツコさんとか、息子のナオユキさんが食べ物を持って、孫やひ孫も連れて遊びに来てくれる。何よりお友達、ご近所さんは、毎日、家の上がって何時間もナミお婆ちゃんの話し相手になっています。

もしも、ナミお婆ちゃんの調子が悪そうだったり体調崩したりすると、ご近所さんがドクター達に連絡を入れてくれる。そうやって、いろんな人の関わりがあって、ナミお婆ちゃんの一人暮らしが続いていたのです。

やがて、ナミお婆ちゃんの旅立ちが近づいてきました。老衰が進み、寝てる事が多くなります。全身がむくんできて、娘のエツコさんにとっては弱っていくお婆ちゃんを見るのがとても辛かったので、娘のエツコさんは「もしも一人のときここで何かあったら私はとても怖い。お願いやから私のところに来て」とナミお婆ちゃんにお願いしました。でもナミお婆ちゃんは認知症が深まる前からずっと君ヶ畑に最後まで暮

らしたいと言っていました。

というのも、生まれ育ったのも君ヶ畑で、旦那さんと結婚して子供を授かって、育児や家事や畑仕事。それから、年老いてゆく旦那さんを介護して看取ったのも君ヶ畑。人生がここに詰まっていました。最後までここに居たいと仰っていました。ただ、ナミお婆ちゃんは娘さんのお願いを無下に断る事はしませんでした。やがて娘さんの家に、殆ど寝たきりの状態で行く事になりました。

でも、最後までトイレだけは自分で行きたいといって、夜中、側に家族がいないときにトイレに立ち転倒してしまいます。頭を七針縫う怪我をしました。目を瞑って唸っている。孫やひ孫が見舞いに来て、返事もしない、目も開けない、でも耳は聞こえているようです。家族の会話の中に「君ヶ畑」というお婆ちゃんの集落の名前が出てくると、そのときだけは一生懸命何か言おうとします。

「もしかしてお婆ちゃんまだ君ヶ畑に帰りたいの？」娘のエツコさんが聞くとナミお婆ちゃんは一生懸命頷きました。エツコさんは「ごめんね、もう一回帰る？」そう聞くと、お婆ちゃんもう一度頷きました。



ナミお婆ちゃんはもう一度自分の家に帰ります。ご近所さんが待ち構えています。家の上がって「お帰り、みんな待ってよ」と声をかけています。京都から息子のナオユキさんも駆けつけて来ました。また仕事帰りのヘルパーさんも挨拶に来まし

た。「お帰りなさい、私も明日からまた通わせてもらうねー」と。お孫さんやひ孫さんもやって来た。そうして、五日間を過ごします。

大切な人に寄り添われながら過ごした五日間。戻ってきてその五日目の日、ちょうど自分はこのナミお婆ちゃんの家に住ました。このお婆ちゃんの寝ている隣の部屋で、息子のナオユキさんと何時間も話してました。お婆ちゃんとの思い出話とか、たわいもない世間話をしていたのです。

そんな会話の途中で、なぜかナオユキさんが喋っていた言葉を飲み込んで、会話をやめ、スツと立ち上がって、お婆ちゃんの部屋に入って行きました。自分も後をついてお婆ちゃんの部屋に入りました。すると、ちようどお婆ちゃんの息が止まったところだったのです。「もう息が止まったぞ」と、ナオユキさんが声を上げると家の裏手から、娘のエツコさんも駆けつけてきました。そして、息の止まったお母さんの手を握って「お婆ちゃん」と声をかけています。

すると息が止まって何十秒か経っていたんですが、娘さんの声かけに返事するかのよう、舞い戻ってくるかのように、お婆ちゃんがもう一度息をしはじめました。そ

れを見たエツコさんは、今度は両手でお母さんの手を握りなおして言いました。



「お母ちゃん、ありがとう。もう、ええよ」娘さんが手を握って「もうゆっくり眠っていいよ」と、その声をかけると、その言葉に安心するかのよう、ナミお婆ちゃんは完全に息を引き取りました。

この時のことを後々になって、エツコさんが振り返っています。「もちろん、悲しい、寂しいというのはあったけど、お婆ちゃんから満足感というのか、あったかいものを受け取った気がする」と、仰いました。

こうしたあたたかな看取り、こういうのは永源寺みたいな農村地域だからできるんだろうと言われることがあります。自分は、こうしたあたたかないのちの営みを全世代で、特に子供も一緒に写真を見られるように写真絵本という形でいまシリーズ化して出版を続けています。『いのちづくみとりびと』という写真絵本のシリーズ名で続けているのですが、その第一集はこの永源寺地域、滋賀県の東近江市の地域。第二集が東北の被災地。そして今回、この三月に出版したのが第三集、東京編です。

都市部でも、農村地帯じゃない都市部でもあたたかく人がつながり、いのちがつないでいける、いのちをつないでいける、そんな営みを自分の取材できる狭い範囲であります。写真に撮らせていただきました。特に、焦点をあてさせてもらったのは一人暮らしではなくて、一人では過ごせない人たちが一緒にひとつ屋根の下で暮らすホ

ホームホスピスというかたちの所へ通わせてもらいました。



東京でマンションの一階を改装した最大五人の方が暮らせるホームホスピス、名前は「櫟（ゆずりは）」といいます。写真に

もあるように櫟というのは新しい芽が出ると、古い葉は落ちる。そうやって木のいのちをつないでいく。そんな櫟にあやかっつて、このホームホスピスの名前をつけたそうです。

家族に身寄りがなかったり、家族が介護できなかつたり、自宅で生活していくのが難しくなつたお年寄りたちが、あるいはがんを抱える人がこの「櫟」にやってきました。介護職員が二四時間三六五日、この「櫟」におられ、ケアタウン小平クリニックスの山崎章郎ドクターも訪問診療に来てくれます。



最初はこの九〇歳になるまで会つたこともなかつた人たち同士が暮らすので、ぎこちなかつたりするのですが、同じ釜の飯を

食つて一緒に暮らして、もっと仲良くなると、自分の心や体に抱えている痛みを分かちあえるようになり、同志のような、仲間のような、ファミリーのようなつながりが生まれてきます。

ここでは一緒に暮らしているお年寄り同士はもちろんですが、ご家族も好きな時にいつでも会いに来られて、ご家族同士が膝を突き合わせて悩みや喜びを共有していく大きな親族のような、ファミリーのようにつながりができていきます。

すると、ある方が亡くなる時には、他の入居者の家族も一緒にそのお婆ちゃん、お爺ちゃんのことをみんなで看取る、そんなつながりが生まれていきます。そしてここで親御さんを看取つた人たちは、親御さんが亡くなった後もこの「櫟」に通つて一緒にクリスマス会を開いたり、何かの手伝いをしたり、他のお婆ちゃんお爺ちゃんの話し相手になつてくれたり、そうやって新たなつながりが生まれています。詳しくは出版したばかりの『いのちつぐみとりびと第三集』をぜひ見て欲しいと思います。

では、時間もそろそろですので、最後にひとつ音楽スライドを見て終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

対談 國森康弘 VS 米沢慧



米沢 こんにちは。これからの時間は特にテーマをもうけていません。今日の映像に関連して、皆さん方もさまざまなお感想がおりかと思いますが、私は國森さんの映像を見るのは今日で三回目です。今回改めて感心したのは、写真もそうですけど、写真に添える國森さんの言葉ですね。その言葉の届け方、届かせ方っていうところがと

ても大きな発見でした。

それぞれの映像で出てくる人たちを全部名前で紹介されていきましたね。名前というのはその人のいのちそのものですね。我々の存在が名前なんです。で、あの人が、この人かではなくて、直接名前で語られる関わり方からも、國森さんの眼差しというのを感じました。

そこで一つ、きつとメッセージなんだろうなあと思ったのは「冷たい死」「あたたかい死」という言葉。その辺のところをもう一度お話ししてただけませんかでしょうか。

國森 私が紛争地とか、経済的な困窮地域で見てきたものはあまりにも悲惨な死でした。本当はもっと生きられたはずなのに生きられなかった子供たちを見て、シャツターが押せないぐらい酷いなあと思うことがあります。そういう時に自分が躊躇していると、背中を押してくれたのが亡くなった子供の親御さんであったり、ご家族であったりしました。「お前、今ここに立っているのはこの子の死を無駄にしないため、写真を撮って世界にちゃんと伝えて、この戦争が終わるように仕事してくれ」というふうに言われることが何度かあって、その時シャツターを押さないといけないという

ふうに思いました。

シャツターは押せますが、目の前にいる亡くなった本人は、やっぱり死を望んでいなかっただろうし、選択の余地もなかったのでしょうか。しかも、もつと長く生きられたら、結婚して子供にも恵まれたかもしれない。そんなつないでいけたはずのいのちを全うせずに亡くなっていった。こんな死に方でいいんだろうか。いのちを生ききつて、自分も全うしたと思えば、周りにも言ってもらえるような死を目指さなきゃいけないんじゃないかと思っただけです。

このような死を冷たい死と言うのならその対極にある死を知りたい。それはもしかしたら、あつたかい死と言えないだろうか、私は紛争地とか貧困地域の死から撮るようになったので、実際にあつたかい死というものがあるのかないのかも知らずに、想像して探して動き始めたところでした。

米沢 そういう点で言いますと、冷たい死というのは、いわゆる3・11でもう一度追体験といえますか、そのへんがあつたんでしょうか。

國森 比べるのは難しいと思うんですが、死に目にあえずに家族を亡くした、家族たちとゆっくり別れの挨拶も感謝の言葉も交



わせないまま亡くなっていったという意味では、すごく辛いという部分で、その3・11で、突然身内を亡くした方と同じだったとは思いますが……。

米沢 今日、いくつかの物語を紹介されましたね。そこで言えばこういう死がそうなんだという実感をもたれたのでしょうか。

國森 私は被災地であたたかい死を探そうとしていたわけではないんです。身内や知り合いを亡くした人たちが被災地で震災の発生以後、どうやって暮らそうとしているのかを知りたかったのです。そこにはあつたかさというよりは亡くなった人の分も、生きていこうというそんな人の姿を見ていたような気がします。

米沢 これまでの僕らの感覚では写真では亡くなっている人の顔やそこに集まる人は外すというものがあつたと思うんですね。それを國森さんはズバリとしつかりと捉えられたのは意志的だったんでしょうか。

國森 そうですね。ひとつには、私たちは普段の生活の中で誕生から亡くなるまでのその生老病死をあまり見ないようにしすぎていたのではないかと感じていました。

今、生まれるのも病院、死ぬのも病院ですから、子供たちは生きることの一番大事な生と死を見る機会がありません。生と死を抜かしたままどうやって生きていくのか、ずっと疑問に思っていたんですね。

新聞にも戦争や事故で人が亡くなって、何人が亡くなったという数字だけが出てきますけど、そこには本当は生身の人間が生き死にしているのに、もしかしたら子供た

ちにはそれがイメージできないんじゃないかと思っていました。

そういうのがあつて、自分がそのあたたかい死を見たい、知りたい、伝えたい、共有したいと思つて、お医者さんや看護師さんに、お爺ちゃんとかお婆ちゃんの訪問診療とか訪問介護に、ついて行くようにしました。

お医者さんや看護師さんが築いた信頼関係があるから「花戸ドクターの紹介だったら、どうぞ、あがつていいよ」ということで自分も敷居をまたがせてもらえたのです。その時点では人が築いた信頼関係という土台に便乗させてもらっていたところがすごくあつたと思います。

それが最初でようやく家族とお話ができる、そこからご家族との対話が始まるのですが、自分の場合はその時に撮らせてもらった写真を、次に会いに行く時に自分が好きだと思つた写真を一枚印刷して持つて行くようにしています。

そうすると大抵のご家族は、それを見て、「ああ、寝たきりで無表情と思つていたお爺ちゃんがこんな優しい顔をするところがあるんだ」とか、「お婆ちゃんを介護している私たちつて、こんないい表情しているんだ」



と客観的に自分を見つめるきっかけになったりするんです。それを続けていると、「これ、わしの遺影にする」というお爺ちゃんが出てきたり、「これ、お婆ちゃんの遺影にしたらどう」って、笑って言える家族が出てきたりします。自分のベッドサイドにその写真を貼っている人とか、私が来ると

分かると前日に美容院に行くとか、気合を入れる人とか（笑）。

そうやって写真が広い意味でのあつたかい看取りのきっかけになり、亡くなるときも亡くなった後も「ほらこのお婆ちゃんええ顔してるやろ、ここまできたら最期まで綺麗なお婆ちゃんに撮ってくれ」と言われることもあつて、写真がご家族の写真を撮らせてくれる、死もそうですが、死というよりはもっといい生を撮らせてくれる、きっかけを与えてくれてるように感じています。

米沢 写真を撮られて、これはと思うものを次に行ったときにプレゼントして見てもらうことでさらにコミュニケーションができていくと。

國森 はい、自分はそうさせてもらっています。

米沢 最期の方の東京の「櫟（ゆずりは）」では、國森さんに撮ってもらった写真を早く見たいというのでみなさんが國森さんの来るのを待っているんですよね。この前も「櫟」を訪ねたときに、みんなが「國森さん、國森さん」って言っているですよ。そういう関わりって言うのは、僕らには不可能なんです。この恋ちゃんにしても、もう高

校三年生だということですが、その後もずっと連絡を取っているんですか。

國森 時々顔を出すようにして、「どうなってるのかな」っていうのはいつも気にしています。

米沢 今日は対談というより、僕がいくつか気になることとか、僕が質問したいなと思ったことを勝手に聞いたんですけど、会場の方で何か質問とかあつたら是非、挙手していただけますかね。國森さんに何か聞きたいっていうことは何かありませんか。

会場 あの先ほど、國森さんがね、お答えいただいた冷たい死とあたたかい死と、その違いの認識ですけどね、私は話を聞いていて、どうもそのあたたかい死というのは、周りに看取りをする人がいた死をあたたかい死と思いたいですよね。

誰も看取りする人がいなくて孤独で死んでゆく、残酷な冷酷な死を冷たい死と認識したいんです。そうすることによって、あたたかい死がね、いのちの受け渡しをその場で行われているということにつながっていくんじゃないかなという認識をするんですね。だからちよつと先ほど國森さんが説明したような認識とちよつと違うような気がするんですけどよろしいでしょうか。



國森 ご教示ありがとうございます。自分の場合は冷たい死とあたたかい死と言ったときに、たとえ一人であっても、自分のいのちを全うしたと、自分で全うしたという状況であれば、自分は一人であっても、それはあたたかいと思いますし、冷たくはないというふうに思います。自分は冷たいと感じるのは、いのちを全うできなかった、自分の授かったいのちを生ききれなかったっていうときに冷たい、選択余地がなかった、選べなかった、そういうのが冷たいと、自分はその現場をみてそう感じたところです。人によって多分、冷たい、あたたかいというの感じ方が違うと思うので、はい、人それぞれかなというふうに思います。

会場 了解しました。

比留間 それでは國森さんと米沢さん、対談をありがとうございます。

【講師略歴】國森康弘(くにもり・やすひろ)

写真家、ジャーナリスト。一九七四年生まれ。神戸新聞社記者を経てイラク戦争を機に独立。イラク、ソマリア、スーダン、ウガンダ、ブルキナファソ、ケニア、カンボジアなどの紛争地や経済困窮地域を回り、国内では、戦争体験者や野宿労働者、東日本大震災被災者たちの取材を重ねてきた。命の有限性と継承性がテーマ。近年では滋賀県東近江市永源寺地域をはじめ滋賀や東北被災地、東京などで看取り、在宅医療、地域包括ケアの撮影に力を入れている。永源寺地域の写真絵本シリーズ『いのちづく「みとりびと」第1集』（農文協、4巻）で二〇二二年度けんぶち絵本の里大賞を受賞。その他、二〇二一年度上野彦馬賞グランプリ、コニカミノルタ・フォトプレミオ二〇二〇、ナショナルジオグラフィック国際写真コンテスト二〇〇九日本版優秀賞など受賞。

最新刊に、東京を舞台にした『いのちづく「みとりびと」第3集』（4巻、二〇一七年3月）。その他の著書に東北被災地の『いのちづく「みとりびと」第2集』（4巻）や『「飯が食べられなくなったらどうしますか？」永源寺の地域まるごとケア』（農文協、花戸貴司医師との共著）、『アンネのバラく40年間つないできた平和のバトン』（講談社）、『家族を看取る』（平凡社）、『証言 沖縄戦の日本兵』（岩波書店）、『子ども・平和・未来 21世紀の紛争』（岩崎書店、5巻、共著）などがある。京大経済学研究科修士号、英カーディフ大ジャーナリズム学部修士号。



弟の岡村春彦(右から2人目)さんご一家、左は岡村雅子夫人



左から佐藤純子、佐藤健、國森康弘、米沢慧、二ノ坂保喜氏

事務局からのお知らせ

1. 静岡県立大学附属図書館「岡村昭彦文庫」未整理資料仕分け作業報告

来年(2018年)は開設10周年になります。それに向けて未整理だった冊子・パンフレット・テープなどの未整理資料の仕分け作業が進行しています。この中には「アキヒコ」自筆メモやベトナム語を勉強していた跡の残る、使いかけノートや講演の記録など興味ある資料が多々あります。「資料室」が開設された折には、岡村学の研究に役立つことと思われます。請うご期待！

2. 函館市文学館企画展のお知らせ

函館ゆかりの写真家と版画家
9月9日～11月12日
写真家は岡村昭彦、版画家は佐藤国男さんです。

3. 「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

- 2016年
- 5月刊 PEN 2016年5月1日号 WOEILD SCOPE 異邦人にはどう映ったか(ロンロン)、Barbican Art Gallery で開催中の展覧会の紹介)
 - 5メデイカル函館 2016年5月号 細野容子 メアリー・エイケンヘッドにホスピスの原点を求めて
 - 6・28 東日新聞 風針
 - 7 図書 7月号 ニノ坂保喜 「死の再発見」
 - 7・2 図書新聞 高草木光一著「岡村昭彦と死の思想」書評
 - 7・25 思潮社「暮尾淳詩集」に「シャッター以前No.4」掲載の「天才少女画家抄」を収録
 - 8・30 水野孝昭「戦場ジャーナリストの出発点」岡村昭彦の部落解放運動
 - 10 澤田教一写真展図録 「フィルムの帰還」高橋しげみ「叫び

とささやきー岡村昭彦と澤田教一「生井秀幸」ベトナム戦争」石川文洋

2017年

- 1 民藝の仲間 399号 高草木光一「聖なる牛を撃つ」
 - 2・1みすず1・2月号 高草木光一「岡村昭彦と死の思想」書評
 - 2・3北海道新聞夕刊 みなみ風
 - 6・5「水俣を伝えたジャーナリストたち」岩波書店刊(平野恵嗣著
- * 新聞記事・書評などは「岡村昭彦の会」のホームページから読むことができます。参照ください。

4. 通信費振込のお願い

会報やお知らせの印刷・送料などは皆さまがお送りくださる通信費(不定期1000円)とカンパで賄っておりますが、今回の27号の発送のための通信費が不足となりました。つきましては「二〇一七」三年、通信費をお送りいただいている方は、同封の振替用紙にて通信費をお振り込みいただければ幸いです。

5. 会報や3月の「AKIHIKOの会」のお知らせ等が「不要な方へ

この会報は、会員として登録された方、最近AKIHIKOの会に参加された方、通信費を一度でもお送りいただいた方にお送りしていますが、今後、会からのお知らせや会報などが「不要の場合」、お手数をおかけしますが「ご一報ください。左記メールでも結構です。

メールアドレス: akihiko-no-kai@kazekusajp

6. AKIHIKOの会について

国際報道写真家・岡村昭彦が残っていた人脈に連なる人々によって開かれた没後八年目の「岡村昭彦の会」の集い(93年11月28日・武蔵野市文化会館)のあと、世話人が今後の活動について話し合い、通称を「AKIHIKOの会」として発足しました。

●AKIHIKOの会の活動

- (1)「AKIHIKOの会」を毎年3月24日の命日前後に行う
- (2)「岡村昭彦研究『シャッター以前』」の刊行継続
- (3)「AKIHIKOゼミ」の開催
- (4)「会報の発行等の活動

以来、「AKIHIKOの会」は毎年開催、例年60人前後の参加。メインゲストには広い分野の方への参加をいただいています。

「AKIHIKOの会」は会長・会則・会費なしの会で、活動については世話人会で協議して運営を行っております。

●世話人(50音順)

- 池上正治 岡村春彦 暮尾淳 佐藤健 白石忠男 高草木光一
 - 戸田徹男 戸田昌子 中川道夫 ニノ坂保喜 比留間洋一
 - 細野容子 松澤和正 横山巖 吉田敏浩 米沢慧
- 事務局 大住敏子 大伴好海

『岡村昭彦の会 会報』 第27号 (2017.7.1)

発行 東京都江戸川区西小岩五十一―二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03-3657-8380

口座番号「00170-6-615123」

加入者名「岡村昭彦の会」